

アメリカ児童図書館黎明期に 子どもの文学普及に貢献した人々(7) ～メイ・マッシー③～

金 山 愛 子

2019年フレデリック・ワイズマン監督のドキュメンタリー『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』(Ex Libris – The New York Public Library, 2017)が日本各地で上映され話題となった。「世界で最も有名な図書館」の舞台裏にスポットライトを当てたこの作品は世界的に評価され、第74回ヴェネツィア国際映画祭国際批評家連盟賞、フェアプレイ映画賞をはじめとした賞を受賞し、それ以外にも多くの賞にノミネートされた。この映画の中で、黒人文化研究図書館(ショーンバーグ黒人文化研究センター)の館長が、黒人女性作家でノーベル賞を受賞したトニ・モリスンの「図書館は民主主義の柱」という言葉を紹介している。ワイズマン監督もインタビューに答えて、図書館が行っている数々の活動にも触れ、「NYPL(ニューヨーク公共図書館)は、すべての人に対して門戸を開くという、非常に民主的な考えを体现している場所なんだ。すべての階級、人種、民族がこの図書館とのつながりを持っている。僕にとって、ニューヨーク公共図書館は民主主義の実例であり、アメリカの最も優れた一面の象徴なんだ」と述べている。¹⁾

この図書館の中央児童室の責任者として35年間を児童サービスに捧げたアン・キャロル・ムーアについてはすでに拙稿で述べた。²⁾大規模な移民の流入、大戦と戦間期、大恐慌という時代に、編集者、図書館員、書店員は、アメリカの子どもたちが「他の声」「他の文化」に耳を傾け意識を向けるだけでなく、移民の子どもたちに対しても楽しみを与え、また自分の先祖の国を知る機会をも提供することに心を砕いていた。その結果として彼らは1930年代の「アメリカ絵本の黄金時代」を創出するに至った。本稿では、ムーアら図書館員や書店員、雑誌編集者らと協力して、長く、良質な本を出版し続けたメイ・マッシー(May Massee, 1882-1966)³⁾の民主主義を中心とした思想と作品における具現化について、出版社に入る前の彼女の経歴をも視野に入れて、検証していく。

一方で経済最優先、大量生産、大量消費の社会であり、他方でグローバル化による多文化共生が求められる時代にあって、私たちは読み継がれる

価値のある絵本をどのように作り、選んでいくのか。そのヒントを、同じような時代に絵本の黄金時代を創出した一人である編集者に探って行きたい。

1. メイ・マッシーの経歴

メイ・マッシーの経歴に関しては、作家であり、日本では上皇の皇太子時代の家庭教師として知られるエリザベス・グレイ・ヴァイニングの記述⁴⁾と、アメリカ初の児童文学部門の編集者となったルイズ・シーマン・ベクトルの『ホーンブック』誌 (*The Horn Book*) 上での紹介文⁵⁾に負うところが大きく、これらが伝記的な情報源となっている。ここでは、エンボリア州立大学ウィリアム・アレン・ホワイト図書館「メイ・マッシー・コレクション」所蔵のコロンビア大学のプロジェクトによるインタビュー記事やマッシーが書き残したエッセイにより、ダブルデイ社で職を得るまでのマッシーの生い立ちと経歴を、マッシー自身による言葉で意味づけしながら明らかにする。

マッシーは、1882年5月1日にフランク・スピंक・マッシー (Frank Spink Massee) の5人の子どもの3番目に生まれた。名前は誕生日にちなんでおり、祖父はイギリスからニューヨークに移住したピューリタンの地主兼農夫であり、読書家であった。⁶⁾

マッシーは物語とどのように出会ったのだろうか。彼女はインタビューに答えて、記憶に刻まれた子ども時代を語る。⁷⁾ 6歳の頃、同じミルウォーキーに住んでいた母の友人のヤング夫人のところに2週間泊まりに行った時のことである。クッキーを焼くヤング夫人と一緒にメイは指ぬきクッキー⁸⁾を作っていた。夫人の「『さんびきのこぶた』のお話は知っている？」との質問に、「知らない」と答えたメイに、夫人はこの昔話を聞かせてくれた。

Ah, very, very poor was she,
Old Dame Pig with her children three.
Robust beautiful little ones
Were those three sons,
Each wearing always, without fail,
A little fancy bowknot in his tail.
But never enough of sour or sweet
Had they to eat.

And so one day with a piteous squeak
 Did the mother speak:
 “My sons, your fortune you must seek.”
 And out in the world as they were set
 The three pigs went. (Interview 1)

メイはこのお話が気に入り、夫人は何度も話してあげた。おかげでメイはお話を覚えてしまい、自分の家に戻ると、近所の子どもたちに教え、彼らもそのリズムをすっかり覚えてしまった。こうして、古風なリズムで語られた物語が幼いメイの心に刻まれた。メイは「本があるのが当たり前の家に育った」⁹⁾と述懐しているが、ある年のクリスマスにイギリスから送られてきた本の中に「さんびきのこぶた」があり、それを弟や妹に読んであげた。こうして「さんびきのこぶた」のお話は、そのリズムとともにメイの中に忘れがたい印象を残したのである。

メイの父親はよく本を読んで聞かせてくれた。ある日、父親が『リップ・ヴァン・ウィンクル』を読んでいた時のこと、自分にも読んで聞かせてとねだるメイに、父親は「気に入らないと思うよ」と答えるのだが、とにかく「聞きたい」とせがみ、メイは父の膝の中によじのぼり、開かれた本を見ながら父の読む物語に聞き入った。何度も何度も父は読んでくれた。そして気がつく、誰にも教わらなくてもメイは字が読めるようになっていた。こうして、読むことを覚えたメイは、その時からずっと本を読む人となったのである。

メイは他の子よりも早く、5歳から学校に行き始めた。7歳上の姉について行きたかったからである。メイの母は学校が送り返してくれるだろうと思って、5歳のメイを送り出したのだが、優しい先生が彼女を迎えてくれ、送り返すことはなかった。勉強ができたメイは飛び級をして12歳で卒業し、高校へ進み、16歳で卒業。18歳で師範学校（今の州立教育大学）を卒業した。メイは、このような早期教育は子どもにとって益にならないと言う。他の生徒の会話に入れず、「とても孤独な子どもだった」と述懐している（Interview 1）。このような孤独が彼女をさらに読書に向かわせたのかもしれない。

その後、姉が教師だったため彼女も教師になるが、教師の仕事は向いていなかったようだ。2年間小学校で教え、その後高校での代用教員を務めながら、ホワイトウォーター・ノーマル・スクール（Whitewater Normal School）で図書館学の短期コースを受けた。¹⁰⁾ 教員時代を振り返り、子

どもたちに読むことは教えたと自負するものの、18歳で10歳の子どもを教えていたメイは、成熟してもいなかったし、教えることへの心構えもできておらず、教師としては失敗だったと語る。

ホワイトウォーター・ノーマル・スクールの後、その年の夏には、ウィスコンシン図書館学校（Wisconsin Library School）でコーネリア・マーヴィン（Miss Cornelia Marvin）のもとで図書館学を修め、「優等」で卒業した。マーヴィンはオールバニー図書館学校（Albany Library School）を代表する人で、オールバニーと同じ内容のカリキュラムを使っていた。メイは朝8時から夕方6時まで学校で過ごし、夜も読書に費やし、マーヴィンが薦める本はすべて読んだ。このサマーコースの終わりには、オールバニーでやる1年分を2か月でほぼ終えた。メイはマーヴィンという有能な師を得て、図書館の仕事を愛するようになっていった。

その後メイの図書館員としての仕事が始まる。まずは、1904-5年頃のこと、シカゴのアーマー学院（Armour Institute）で図書館員の助手の職を得た。工学専門の学校であったため、技術工学に関するレファレンスが主な仕事だったが、そこの図書館員は本を綺麗な状態に保つことに専心し、仁王立ちになって学生たちを監視していたため、工学部生は委縮して頭を上げることさえできなかったし、利用者の役に立ちたいというメイの希望もくじかれた。しかしメイはこの図書館員と何とかやっていく術を見出し、2年間この図書館で働き学生の学びや教員の研究を支援した。

しかしこれ以上この図書館にとどまることを望まなかったメイは、マーヴィンに頼んで他所に移ろうとしていた。その頃ミルウォーキーで友人の結婚式に出たメイは、そこで当時国内でもっともすぐれた図書館員の一人であったテレサ・エルメンドルフ夫人（Mrs. Theresa Elmendorff）に出会う。エルメンドルフ夫人はミルウォーキーで図書館員をしていたが、結婚後、バッファロー公共図書館（Buffalo Public Library）の副図書館長を務めており、花嫁のおばとして結婚式に参列していたのである。その後、ニューヨークのバッファロー公共図書館館長のエルメンドルフ氏から招聘状がメイのもとに届いた。

バッファロー公共図書館に着任すると（1907年頃）、メイは初め児童室の仕事を望まなかったため、メインデスクでの仕事に就いた。しかしエルメンドルフ氏はある日メイを児童室に送るように彼女の上司に指示する。児童室を見て、もっとやれることがあると感じたメイは、児童室の仕事をしたいと申し出る。氏の作戦通りに事は進んだ。エルメンドルフ氏は、メイが児童室を見たら、何かやりたくなるに違いないと知っていたのであ

る。メイはまず、二人のもっとも魅力的な女の子を助手につけ、自分のやりたい仕事に着手した。彼女は、「本当にすばらしい時間でした。私はそこで5年間勤務しましたが、私の人生の中であの頃ほど楽しい時間を過ごしたことはありません」と回想している（Interview 1）。広々とした児童室には、50人もの子ども達が入ってもお互いに邪魔にならなかった。しかし50人も子どもがいても、静寂は守られ、ピンの落ちる音さえ聞こえたと言う。この図書館での5年間で、メイは子どもたちが本のどういうところが好きなのかを学んだ。

この頃は移民が大量に流入した時代でもあった。イタリア人の女の子がいつも8人から10人の子分を連れてきて、その子たちに本を割り当てるので、いつ移民船が到着したのかが分かった。ロシアの農民の子どもたちでユダヤ人大虐殺を逃れてやってきた子どもたちもいたが、その子どもたちの中には、児童室で読むことを学んだ子どももいた。キャンデー工場で働いていた15歳くらいのイタリア人少年は、まだ英語が上手でなかったが、ハワード・パイルの「アーサー王物語」の続きが知りたくて4冊読み切り、その頃には、どんな仕事でもできるほどの英語を身につけていた。彼はその後シェイクスピアを全部読んでしまい、そのうち階下の大人の本を借りるようになった。ハワード・パイルを読むことで、独学で読書力を身につけ、楽しみを見出したのである。もう一人のイタリア人の女の子は、本を濡らしてしまっ、罰として貸し出し禁止になったのだが、彼女は罰則ということを理解せず、本が借りられないのは、その本がまだ乾かないからだと思った。そんな子ども達とのやり取りの詰まった5年間であった。

メイはエルメンドルフ夫人から紹介された本を読むことで、子どもであることとはどんな風かを理解できたと言う。子どもであることは、大人とはまったく違う経験であり、「それは愛を信じること」と彼女は語る。

子どもであるということは、妖精がやってきて耳もとで囁いてくれるほど小さいということ、それはかぼちゃを馬車に、ネズミを馬に、孤独を愛らしさに変えてくれること。どの子も、自分自身の心の中に妖精のお母さんがいる。子どもであるということは、胡桃の殻の中に住みながら、自分は無限の世界の王であると思うこと。一粒の砂の中にも世界を見、自分の手の中に無限を持ち、一時間という時間の中に永遠を持つこと。（Interview 7）

「愛を信じること」という言葉は、上記引用の直前に語られた言葉である

が、後に続く文との関係性ははっきりしない。しかし、子どもであるということとは常識や現実の押しつける限界に縛られないことであり、大人が「空想」という言葉で片づけてしまう事柄が、真実として体験でき、すべてのものを無限、永遠の相のもとで見ることでの特権と言い換えることができよう。¹¹⁾ マッシーは、「わたしは本を編集する時はいつも、これを肝に銘じてきました」と述べる (Interview 7)。

マッシーはバッファロー公共図書館で5年間働いた後、エルメンドルフ夫人が女性で初めての会長に就任していたアメリカ図書館協会 (American Library Association, 以後ALA) のブックリストの編集者の仕事を引き受けることにし、1912年シカゴへ移った。ブックリストの編集者の仕事は国内で出版されたほとんどの本とその本に関する情報を集め、毎月200冊ほどの本を選定し、簡潔な解題を添えて発行するというものである。それを読んで図書館員は図書館にどんな本を置くかを検討できるようになっている。1か月に70人を超える専門家に書評を頼むこともあり、さまざまな意見を調整しなければならなかった。¹²⁾

ブックリストは図書館員や出版社にも紹介する必要があったため、ブックリストの編集者としてマッシーは図書館員の会合や、クラブや学校での会合にブックリストを携えて行った。また、ブックリストの編集に携わる5年ほど前から、彼女はミシガン州の師範学校を回って、子どもの本や読書、ストーリーテリングについて講演をした。インディアナ州のインディアナポリスを訪れることも多く、そこで書店を営み成功していたフレッド・メルチャー (Frederick Melcher) に出会った。彼はその後ニューヨークに移り、『パブリッシャーズ・ウィークリー』誌 (*The Publishers Weekly*) の編集者となる。彼はその後の50年間本の世界で非常に大きな力となっていく人だった。¹³⁾ お互いにニューヨークで仕事をするようになってからも彼らの交流は続いていく。

マッシーは、後年、エルメンドルフ夫人とメルチャー氏の本を扱う手つきは、他のどの人の手つきとも違ったと回想する。二人の大きくて美しく、形の良い手はピアニストがコンサートでピアノに向かうときのように、常に本に対する崇敬の念が感じられた。それは本への深い愛情からきた、しかもまったく無意識の動作だったと回想する (Interview 2)。本への深い愛情が示唆される話である。

ALAで働いている間にマッシーは、図書館員は出版社に対して不信感が強く、出版社とコンタクトを持つことにより、商業的に影響を受けることを恐れていることを知った。ALAの編集者として毎年ニューヨークへ

行き、出版社側の考えをブックリストを通じて図書館員に伝えることを決める。こうして彼女はニューヨークの出版者と頻繁に会う機会を得、出版社での仕事をオファーされることもたびたびあった（Interview 1）。ALAでの仕事に満足していたマッシーは、仕事を変えるつもりは毛頭なかったのだが、マクミラン社に続いて児童書部門を設置しようとしていたダブルデイ社からこの新しくできる部門の編集者の仕事をオファーされた。ダブルデイ社は当時の出版界の巨人の一つであった。マッシーはこの仕事を受けたのだが、女性が男性社会の中で仕事をすることの難しさを最初から嫌と言うほど思い知らされ（Interview 2）、最初の一年は順風満帆なスタートとは言えなかったが、ダブルデイ社でのマッシーの成功は拙稿で述べたとおりである。¹⁴⁾

こうしてメイ・マッシーは1912年から始めたALAのブックリストの仕事辞め、子どもの本の編集者となる。1923年からダブルデイ社で、そして1933年からヴァイキング社で多くのすぐれた本を子どもたちに届けることになったのである。マッシーの作る本の完成された美しさ等、彼女の成功の要因はいくつもあるだろうが、図書館員として子どもと親しく接し、本を読む子どもを間近に観察した経験が大きかったことも事実であろう。マッシーは子どもと読書について数多くのエッセイを残している。その中でも子どもが自分らしくいることに関する彼女の考えを次章で探っていく。

2. マッシーの考える子どもと読書

マッシーは「子どもほど生き生きとしてフレンドリーなコスモポリタン（世界市民）はいない」と言う。他の人々に対して純粋な好奇心を抱いているからである。さらに子どもをコスモポリタンへと導いているのは、同じくコスモポリタンなアメリカの子どもの本であると考えられる。¹⁵⁾ 同時にマッシーは、子どもの本の発展と民主主義は切り離すことができないものだと考えている。自分たちの本作りは、民主主義の社会であるからこそ可能なものである。これらの本が国中に行き渡り、何百万もの子どもたちがその本の中のなにがしかの真実や美しさに触れることができる。何百万もの子どもたちのどの子も一人ひとり他人とは違った趣味や望み、選ぶ権利を持ち、自分の好きな道を見つけてその道に進む自由がある。唯一の制限があるとしたら、自分自身の理解が限られているという制限だけである。しかし、この制限も本を読むことで徐々にその限界は撥ね除けられ、自分であることを、そして他者を知っていくのである。¹⁶⁾

直接的な体験も教育的意味をもつが、想像力なしの体験では先に進めないというマッシーは考える。ここで本の仕事が始まる。ワイズマン監督が100年後に述べた通り、図書館の児童図書室ではまさに民主的な教育が行われていた。ここでは子どもたちはどんな本でも選ぶことができるし、様々な人種や文化、信条に接することができるのである。図書館では、「どの子どもにもふさわしい本をふさわしい時期に」見つけることができる環境とそれを支援する人が存在する。¹⁷⁾

子どもたちの幅広い関心に応え、彼らの知らない広い世界の人々やその暮らしについて知らせてくれるのが子どもの本の書き手であり、世界各国からやってきたアーティストたちのアメリカの子どもへの貢献には目を見張るものがある。マッシーが列挙するアーティストの出身国は、ロシア、中国、日本、インド、イラン、イタリア、トルコ、ハンガリー、フランス、ノルウェイなど、20か国以上に上る。¹⁸⁾ 1945年頃には子どもの本の出版を専門とする出版社が46社、専門の編集者を置いているのがそのうちの32社ある。1930年代半ばからの10年間で、出版された子どもの本の新刊は8677冊を数え、年間800から900冊出版されているという計算になり、1943年の売り上げは2億ドル近くに上った。¹⁹⁾ 大恐慌から第二次世界大戦にかかる時期にこれだけの子ども本の需要があったというのは驚くべき数字である。ポール・アザールは「アメリカは、よそ目にも感心するほど子どもを大切にする。若い国アメリカは、児童教育に若々しい、不断の情熱を傾けている。子どもを守り、その精神を養い、とびきり上等の糧を与えて、その好奇心を満たしてやるために、なんとという感嘆すべき努力を払っていることだろう！」と賛辞を惜しまない。アザールは、子どもの本の質、量の充実に注目し、「美しいものを愛する気持ちばかりでなく、美しいものに親しむ習慣を若いころからつけようと努めている。」と、出版業界や図書館の営みを評価している。²⁰⁾ 現実には、移民の流入する時代であったので、排他的な扱いや経済格差による不利益、人種差別が社会の現実として厳然と存在していたことは21世紀の我々の社会を見ても容易に想像できる。だが、おそらくは、ルソーのロマン主義的子ども観が、アメリカでは、エマソンやソロー、ホイットマンといったトランセンデンタリスト（超絶主義者）によって引き継がれて語られ、19世紀末まではそのような言説が影響力をもっていたのではないかと考えられる。

マッシーは純粋な子ども観からさらに進めて、子どもたちが全人格的な成長を遂げるための支援をすることを出版者の使命として語っている。民主主義的な思想である。

アメリカの子どもの本の出版は、自由で普遍的な教育という考えから生み出されたものです。それは一人ひとりの子どもへの教育は、その子が全人格として成長し、自分の中の最大の可能性を知り、自分の周りや外国にいる他の人びとへの最大の理解をもつ人になった時に成功したと言えるという考えです。²¹⁾

自分と違う「他の声」「他の文化」に意識を向けるには想像力が必要であり、そこで本の出番が来るとマッシーは考えた。「他者」を知ること、自分自身を知ることにもなる。マッシーの子どもと読書に関する思想が彼女の作品にどのように具体的に表わされているのかを、『あひるのピンのぼうけん』と『はなのすきなうし』を使って探っていきたい。

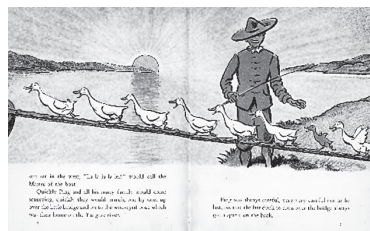
3. メイ・マッシーの思想はその作品にどのように具体化されているか？

『あひるのピンのぼうけん』

マッシーが晩年のシンデルとのインタビューで、よい本の例としてあげているのは、マージョリー・フラック文、クルト・ヴィーゼ絵の『あひるのピンのぼうけん』(*The Story about Ping*, 1933)である。²²⁾ この物語は中国の揚子江を舞台にして、大家族と過ごす小さなあひるのピンが、仲間から離れて一日を過ごす物語である。幼年向きの絵本を得意とするマージョリー・フラックのテキストに、中国で暮らした経験があるドイツ出身の画家クルト・ヴィーゼが挿絵を描いた。マッシーは、フラックがこのストーリーを完成させるまで8回から10回も書き直したと明かし、物語を損なうことなく、どの言葉も意味ある言葉となるまで、これ以上一言も取り除くことができないほど切り詰めたこの作品は、自分が出版した幼い子ども向けのお話の中でも完璧な一冊であると話している。マッシーがそのストーリーを厳しく吟味した作品だったと考えられる。はじめに、『あひるのピンのぼうけん』にはマッシーの思想や価値観がどのように現れているのかを明らかにしていこう。

マッシーの編集助手をしていたアニス・ダフは本のジャケットカバーなどに本の解題を書く際は、「形容詞や副詞はできるだけ使わずに、よい、具体的な名詞と生き生きとした動詞を使った方が、その本への信頼をうまく得ることができる」とマッシーからアドバイスを受けている。²³⁾ 本の解題と絵本の文では書き方は異なるが、『あひるのピンのぼうけん』では

どのように形容詞と副詞が抑えられ、主に名詞と動詞でストーリーを進めているか見ていこう。物語は次のように始まる。



(図版 1)

Once upon a time there was a beautiful young duck named Ping. Ping lived with his mother and his father and two sisters and three brothers and eleven aunts and seven uncles and forty-two cousins.

Their home was a boat with two wise eyes on the Yangtze river.

(p.2. 以下、下線は筆者による)

物語の冒頭では、ピンの名前と彼を表す二つの形容詞 (beautiful, young)、それから船の特徴 (with two wise eyes) と大勢の家族を表す数詞に形容詞を使うだけで、ほぼ名詞と動詞で物語が進む。昔話のような始まりである。

ピンの家族の毎朝の日課は、舟から揚子江の岸辺への移動という決まった行動で始まる。

Each morning as the sun rose from the east, Ping and his mother and his father and sisters and brothers and aunts and uncles and his forty-two cousins all marched, one by one, down a little bridge to the shore of the Yangtze river. (p.3)

言葉が切り詰められたテキストではあるが、必要に応じて繰り返しを多用し、リズムを整え心地よさを与える。「揚子江」「the Yangtze river」やピンの家族の紹介“his mother and his father and his (two) sisters and (three) brothers and (eleven) aunts and (seven) uncles and his forty-two cousins”や、彼らのルーティンの行動“all marched, one by one,”は少しずつ表現を変えながら繰り返され、彼らの日常のお決まりの活動を表す。特に「揚子江」を表す“the Yangtze river”は文の最後に置かれ、音声的にもその長母音により水量の多い大河の悠々たる様が余韻をもって想像される。

毎朝舟を降りて、川や岸辺で一日を過ごし、夕方になると舟に戻るというあひるたちの決まった日常の行動のなかで、あひるたちが少し緊張する

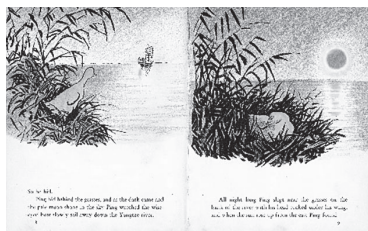
のは夕暮れに舟に戻る時である。

Quickly Ping and all his many family would come scurrying, quickly they would march, one by one, up over the little bridge and on to the wise-eyed boat which was their home on the Yangtze river.

Ping was always careful, very very careful not to be the last, because the last duck to cross over the bridge always got a spank on the back. (pp.4-5)

ここでは、形容詞や副詞を繰り返し使い、強調する。最後になっておしりをぶたれないように、我先にとボートに乗り込む場面では、“Quickly”という短母音で固い印象を与える破裂音を繰り返している。最後になることを怖れるピンの心情を表すために、“Ping was always careful, very very careful not to be the last,”のように畳みかけるように繰り返すこともある。

繰り返しは、語句レベルにとどまらず、文レベルでも起こる。ピンを乗せずに去ってしまった舟を草のかげからピンが見送るシーンが一例である。



So he hid.

Ping hid behind the grasses, and as the dark came and the pale moon shone in the sky Ping watched the wise-eyed boat slowly sail away down the Yangtze river. (p.8)

(図版2)

この場面は、テキストと挿絵が見事に一体化した場面である。“So he hid.” “Ping hid behind the grasses,” という繰り返しは、ピンのいつもと違う行動を強調する。他方で、最後の文章 “Ping watched the wise-eyed boat slowly sail away down the Yangtze river.” では、[aɪ] [ou] [i:] [eɪ] [au] のような二重母音や長母音が多用され、ゆったりとした揚子江の流れを表す。結果的に “come scurrying” などのあひるのせわしない動きや、河で生活する人々の活動 “Big boats and little boats, fishing boats and

beggar's boats, house boats and raft boats…” (p.11) の動性を引き立てる短母音や軽快な繰り返しと対比される。

『あひるのピンのぼうけん』は、これまで見てきたように、繰り返しによる心地よいリズム、強調、長母音や二重母音と短母音の組み合わせ、オノマトペの多用により、無駄のない言葉で、しかもイメージ豊かでリズムカルに語られている。その結果昔話のように直截で、イメージしやすい物語となっている。ラトビアの詩人イネセ・ザンデレによれば、このような構成は人間の無意識の欲求を捕えているということになる。

人はリズムや規則性に惹かれます。…子どもたちが、おとぎ話や詩で用いられる音や言葉のくりかえしや、普遍的なストーリー展開をおもしろがるのは、読むたびに発見があるからですが、同時に、作品に規則性がもたらされているからでもあります。世界が美しい秩序を獲得するのです。²⁴⁾

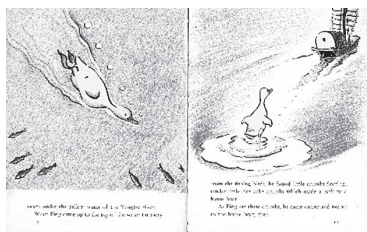
あの「さんびきのこぶた」のお話のように、昔話に準ずるリズムや規則性による一つの秩序ある世界が確保されていれば、小さなあひるの冒険の興奮も安心感に支えられて幼い子どもに受け取られるのである。

ストーリーの重要性を常に説いていたマッシーにとっては、よい絵本の条件の一つは、簡潔で直接的な言葉で物語が明快に語られることであった。しかし、よいストーリーは、言葉の吟味や用法、リズムだけでは達成することができない。第二の条件は、物語の構造であるとマッシーは考えていた。「子どもの本にははっきりとした構造がなければなりません。物語はアーチのように組み立てられるのです。明快に始めて、頂点に向かってアイデアを掲げていき、それから再び下に降りていきます。その仕事が終わった時には、完成した完璧な形をしているのです」とマッシーが語るのを聞いたと、作家のセイヤーズは証言している。²⁵⁾

『あひるのピンのぼうけん』の構成はどうであろうか？大家族と毎日同じことを繰り返す日常の中で、ある日船頭の呼び声を聞くのが遅れ、ビリになっておしりをぶたれるのが嫌なばかりに、舟に戻らないという変化が起きる。そしてピンが人間の男の子に捕まり、夕食のご馳走にされそうになるという危機的冒険を頂点に物語はアーチ構造をとり、しかし、男の子に放してもらえたおかげで、おしりをぶたれても家族の元に戻ったピンの安心感と冒険後の満足感で話は終わる。単純なストーリーではあるが、危機的状況をアーチとした行きて帰りし物語となっている。飛躍もなく、読

者を裏切ることなく物語は終わる。

第三にマッシーは、この本が幼い読者の心にひき起こすと思われる感覚について述べる。シンデルのインタビューに答えてマッシーは、この物語には「遠く離れて」(“far away”)の感覚が描かれていると話した。『あひるのピンのぼうけん』を読むような幼い子どもにとって、「遠く」という感覚は未発達だと言う。「通りの向こうだって『遠く』かもしれない。でもこの本は子どもに遠い世界について教えてくれる。遠い場所として大河が描かれ、自分と同じようにその河で生活する人々がいる。そして小さな少年少女が描かれているけれど、自分とは全然違う様子をしていて、それがさらに『遠く離れた』感覚を強める。たとえば3歳の子どもはこの本が好きになると思うが、彼らにとってあひるは身近な動物で、あひるのおかげでこの物語に親しみを感じつつ、同時に、『遠く離れた』感覚というものも教えられる」とマッシーは語る。



(図版3)

「遠く離れて」(far away)という感覚は、中国という地理的設定だけで呼び覚まされるものではない。ピンの冒険は、家族から離れて「黄色い河」(本書では河は黄河ではなく揚子江だが、“the yellow water of the Yangtze river”と呼ばれる)を泳ぎ、水の中にもぐるといふ、家族やいつものルー

ティンワークを離れることで始まる。捕獲という予期せぬ出来事に遭遇したとしても、残りの67羽を離れて一人になった時に、同じ揚子江のいつもと違う場所で、いつもと違う鳥を見、今まで見たことのない人間と出会う。その冒険こそが、ピンと一緒に冒険している読み手である子どもの心を動かし、「遠く離れて」の感覚を強めるのである。このような孤独を通して得られる内面世界の広がりや、レオ・レオーニの『スイミー』でも描かれることになる。『あひるのピンのぼうけん』は、バーバラ・ベイダーの「絵本は子どもにとっての経験」とあるという言葉に裏打ちするような作品となっている。²⁶⁾

あひるに感情移入する子どもは、様子の違う中国の子どもと自然と触れ合い、「自分の周りの国にもっと意識を向け」ることになる。これはマッシー自身が、1933年にヴァイキング社で初めて出したカタログで表明した意気込みと重なる。「アメリカの若い人たちがもっと明快に考え、感じ、自分の周りの国にもっと意識を向け、そして自分の国でもっと自分らしく

いることができる。同時代の人々に何かを与えることにもっと前向きになり、与えることそのことに喜びを見出すことができるようになる。そのための手助けとなる本を作りたいと思います」(Vining, ix)。それでは、「自分の国でもっと自分らしくいることができる」ことはどのように描かれているだろうか。

『はなのすきなうし』

マンロー・リーフ文、ロバート・ローソン絵の『はなのすきなうし』(*The Story of Ferdinand*, 1936) は大人気を博し、絵本から映画や演劇が創られていった。1936年9月に初版が出て、同年10月には2刷り、11月には3刷りという具合で、1年後の1937年9月には8刷りが出るほどの好評だったが、同時に当時の政治状況により様々な憶測や議論を招いた。²⁷⁾



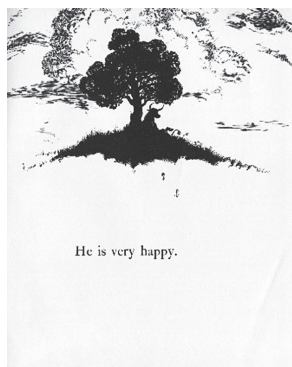
(図版4)

この物語は空想物語でありながら、リアリティを感じさせる文章と挿絵で、ついついリーフのトールテールに読者は乗ってしまう。他の牛たちとは違って、花の匂いを嗅ぐのが好きなフェルジナンドは、ふとした誤解からある日マドリッドの闘牛に連れていかれるが、闘牛場でも観客の女性たちが髪に飾った花の匂いを嗅ぎはじめ、闘牛として用をなさず、結局はもとの野原に戻されるという話である。のどかで幸せな生活をおくっていたフェルジナンドを知る子どもは、蜂に刺されて豹変する姿を見られて「猛牛」に仕立て上

げられた彼の今後にはサスペンスを抱き、大都会マドリッドを舞台にした美女や闘牛士の少し大人っぽい絵から異世界を感じ、彼の行く末を心配し、しかし闘牛場でやんやと騒ぐ観客をものともせず、たたずんで自分の好きな花の匂いを嗅ぐフェルジナンドに心から喝采を贈る。躍起となる闘牛士との対照に笑い、最後にはフェルジナンドがもとの生活にもどれてよかったという安心感を抱く。瀬田貞二の言う「力いっぱいの冒険、ドラマ」との言葉を十分に体現した作品である。²⁸⁾ アーチ構造でストーリーが展開し、ローソンの動きとユーモアのある挿絵は、カラーではない白黒の線画でありながら、このストーリーと有機的に結びつき、効果を高めている。たとえば、闘牛場のゲートから顔を出すフェルジナンドの小ささと、テキストの "FERDINAND" というポイントを落とした文字が、「猛

牛」という触れ込みとフェルジナンドの実態の乖離を絵と共に一体となって表現しており見事である（金山，2017，16－17）。ローソンの劇画化された牛や人間の表情と、リアリティのある風景の融合が楽しい。モノクロのペン画であるが、線の太さを変えながら、少ない線で躍動感と安定感を出している。グリックが「多色刷りが単色刷りよりも良いとは限らない」と言うときに例にあげた単色刷りの作品の一つにこの作品があげられている。²⁹⁾

文や挿絵だけでなく、タイポグラフィや紙質、本の大きさなど装丁そのものにも一体感が感じられる。正方形に近く、手にどっしりとくる質感、ピンクのクロスに白い花模様とフェルジナンドの姿が微笑ましく愛すべきもので、テキスト、挿絵、装丁による一体感により美しい絵本となっている。販売実績も1.5ドルで5000部印刷したものがたちまち売り切れてしまった。その後増刷が繰り返され、今でも出版されている。ヒトラーやスペインのフランシス・フランコは本書を禁書とし、反面、インドのガンディーやルーズベルト大統領夫人のエレノアに愛されたと言われている。1938年にディズニーにより映画化され、2017年にはレスラー俳優が雄牛役となって映画化されている。³⁰⁾



(図版5)

このフェルジナンドについて、マッシーはどう見ていたのだろうか？彼女はフェルジナンドを「人がやるべきだと思うことなく、自分がやりたいと思ったことをやり通した変わり者の牛」と呼び、この物語はアメリカ人のユーモアの感覚に響いたのだろうと推察している。“But not Ferdinand.”（「けれども、ふえるじなんどは ちがいました」）というフレーズは、舞台でもスクリーン上でも子どもの劇でも、多くの子どもの口にのぼったということである。³¹⁾

この本は、人々の自分自身であることへの欲求に共鳴して、これだけの人気を博したと思われる。物語の最後は“*He is very happy.*”（「ふえるじなんどは とても しあわせでした」）で終わる。児童文学の翻訳家であり評論家である清水真砂子の、優れた「子どもの文学は幸福に目を凝らしている」との批評は、この物語における「幸福」の有り様をも示唆しているように思われる。

子どもの文学は幸福に目を凝らしているという気がします。世の大人たちが一般には幸福とは思わない何でもないことに、子ど

もたちは、そしてまた大人だってどれだけ喜びを見出しているかを、優れたこどもの文学はきちんと書いている。(中略) いろいろあるけれども、人間はこんなふうに生きられる、こんなところに光を見出す力をもっているということを、手を変え、品を変え、語ってくれている。³²⁾

ピンやフェルジナンドのように、他とは違う経験をする自分、大勢の中にいるけれど他とは違う自分、そして今まで知らなかった世界を絵本は描いて見せている。それも実にさりと、まったく教訓じみたところや教育的な意図は感じられないようにユーモラスに語られている。フェルジナンドに至っては、作者の意図と無関係に、彼の行動規範は彼が平和主義者だから、コミュニストだから、ゲイだからと理由をつける解釈がされ続けてきた。³³⁾ 政治的、宗教的信条や性的志向に関係なく、自分が望むことができる幸せという素朴な真実を人々が受け容れるのは容易でないことも、フェルジナンドをめぐる議論から推察される。清水の言う「世の大人たちが一般には幸福とは思わない何でもないことに」喜びを見出すという文学の務めをさりとやってのけているのは、見事としか言いようがない。

おわりに

世の中には「子ども」や「移民」という言葉で一括りにされてしまいそうな存在がある。しかし、「移民」と言っても、祖国を逃れてきた理由は様々であり、多様な人種の人々が多様な信仰や思想、文化を持ってアメリカにやってきたのである。そしてやってきたアメリカにおける受容のされ方も一通りではなかった。マッシーはバッファロー公共図書館の思い出の中で、3人のイタリア移民の子どもに言及するが、同じイタリア出身でも振る舞い方や本との向き合い方もそれぞれである。

このような子どもたちがアメリカに迎え入れられ、そして本を読んで学ぶことができるのも、またアメリカ生まれの子どもたちが本を通して、知らなかった世界について知るのも、アメリカが民主主義国家であるからであり、図書館が誰に対しても開かれているという民主主義を守っているからである。そのような土台に子どもの本の出版は成り立っていることをマッシーは自覚していた。だから、そのような子どもたちに応え、彼らの地平線を広げる努力を惜しまなかったのであろう。子どものための物語では、民主主義は「自分であること」「自分の本当に望むものであること」を可能にしてくれる目に見えない土台として、やがて成長した子どもたち

に理解されることであろう。個人としての子どもを描くことを通して、自分であることは、他の人がその人であることを認めることであり、偏狭な排他主義に陥らないでお互いを受け入れることもマッシーは繰り返し願っていた。

社会はますます流動的かつ多様になり、好むと好まざるとにかかわらず日本も変わっていくことが求められている。メイ・マッシーの思想と彼女の出版した作品は、日本社会にあって私たちの目指すべき方向性、質への示唆を与えてくれているように思う。

(謝辞) 本研究はJSPS科研費16K02512の助成を受けたものです。

註

- 1) 『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』プログラム、16. 本稿は第21回絵本学会（2018年6月2日札幌大谷短期大学部）での発表「アメリカ絵本の黄金時代を創出した編集者に学べること」を基に加筆したものである。2017年9月の調査に協力して下さったウィリアム・アレン・ホワイト図書館Special Collections and Archives図書館員のShari Scribner, Rebekah Curry, 学生アシスタントのMaria Moylan, Joslyn Barton, Dayne Sabatos, Ally Urban, Madison Waskoの各氏及び「メイ・マッシー・コレクション」に御礼申し上げます。
- 2) 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々(1)～アン・キャロル・ムア①～」『敬和学園大学研究紀要』第22号、2013年、133-155. 「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々(2)～アン・キャロル・ムア②～」『敬和学園大学研究紀要』第23号、2014年、73-96.
- 3) メイ・マッシーの誕生年については、George V. Hodwanec, ed., *The May Massee Collection; Creative Publishing for Children 1923-1963 A CHECKLIST*, Emporia State University, 1979の「まえがき」でWilliam Allen White Libraryの館長であったGeorge V. Hodwanecは1881年とし、同書所収の“May Massee: Who was She?”でElizabeth Gray Viningは1883年としている。現在同図書館で発行しているリーフレットでも1883年生まれとされている。しかし、『ホーンブック』誌の1967年4月号(*The Horn Book Magazine*, Vol. XLIII, No. 2, April, 1967)の“The Hunt Breakfast”(p. 132)のお悔み欄では1882年生まれとなっている。新聞のお悔み欄で84歳となっていることから、1882年をマッシーの正確な誕生年として採用する。
- 4) Elizabeth Gray Vining, “May Massee: Who was She?”, George V. Hodwanec, ed., *The May Massee Collection; Creative Publishing for Children 1923-1963 A CHECKLIST*, Emporia State University, 1979, v-xi.
- 5) Louise Seaman Bechtel, “May Massee, Publisher,” *The Horn Book*, July-August, 1936, 208-216.
- 6) 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々(5)～メイ・マッシー①～」『敬和学園大学研究紀要』第26号、2017年、2.

- 7) マッシーの経歴に関する記述は、別途付注しない限り、The May Massee Collection, Columbia University Oral History Project: Interview 1 (by Elizabeth Rumics, December 12, 1964), Interview 2 (by Elizabeth Rumics, January 12, 1965), Interview (not numbered, by Virginia Ellison, February 2, 1965), Interview 7 (by Virginia Ellison, November 10, 1966) による。
- 8) 子どもがお人形用にとって食べる指ぬきで型を抜いた小さなクッキー。
- 9) May Massee, "May Massee's Record" in "What a Publisher of Children's Books Needs," The May Massee Collection, Folder Typescripts (Massee) S-Z.
- 10) 同上。
- 11) 実際、Carl Sandburgの*The Rootabaga Stories* (ルータバガ物語 未邦訳) の中でトウモロコシ畑の妖精のことを読んだマッシーの姪が、おじいちゃんとトウモロコシ畑で遊んでいた時に、おじいちゃんには妖精の声が聞こえるということを知って嬉しくてスキップして畑から出て行ったことを回想する (Interview 1)。
- 12) May Massee, "May Massee's Record," in "What a Children's Publisher Needs."
- 13) アン・キャロル・ムーアらと「子どもの読書週間」をALAの事業として企画したのもメルチャーであったし、同じくALAのコールドコット賞やニューベリー賞を創設したのも彼だった。
- 14) 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々(5)～メイ・マッシー①～」『敬和学園大学研究紀要』第26号、2017年、「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々(6)～メイ・マッシー②～」『敬和学園大学研究紀要』第27号、2018年。
- 15) May Massee, "New Horizons in Children's Books," The May Massee Collection, Folder Typescripts (Massee) M-O. ca. 1946.
- 16) May Massee, "Children's Books in a Democracy," The May Massee Collection, Folder Typescripts (Massee)
- 17) May Massee, "Ten Years of Children's Book Publishing in the U. S. A." The May Massee Collection, Folder Typescripts (Massee) S-Z. 一部 "New Horizons in Children's Books" と重複している。
- 18) May Massee, "New Horizons in Children's Books."
- 19) May Massee, "Ten Years of Children's Book Publishing."
- 20) ポール・アザール、矢崎源九郎・横山正矢共訳『本・子ども・大人』紀伊國屋書店、1957/1990、128-129.
- 21) May Massee, "Ten Years of Children's Book Publishing."
- 22) The May Massee Collection, Interview by Morton Schindel, <https://www.emporia.edu/dotAsset/918affa8-03b1-471f-96d3-0f73da6539fa.mp3> (2017年7月28日取得)
- 23) Annis Duff, The May Massee Collection, Folder RE C-D.
- 24) 2018年「国際子どもの本の日」ラトビアからのメッセージ「本の中では、小さいものが大きい」JBBY, *Book & Bread*, Vol. 134, 11.
- 25) Frances Clark Sayers, "May Massee as the Authors of Her Books See Her," *The Horn Book*, July-August, 1936, 229.
- 26) Bader, 1.
- 27) *The Story of Ferdinand* の受容と翻案については Sharon MacQueen が詳しく論じている。Debra Whelan, "Sharon McQueen Talks about Her Fascination with

The Story of Ferdinand,” *School Library Journal*, June 12, 2008. <https://www.slj.com/?detailStory=sharon-mcqueen-talks-about-her-fascination-with-the-story-of-ferdinand>

- ²⁸⁾ 瀬田貞二「古典絵本の教えるものくちびくろサンボ」『瀬田貞二子どもの本評論集 絵本論』福音館書店、1985/2003年、215.
- ²⁹⁾ Milton Glick, The May Massee Collection, Folder RE E-G.
- ³⁰⁾ Karen MacPherson, “Hitler banned it; Gandhi loved it: ‘The Story of Ferdinand,’ the book, and now, film.” *The Washington Post*, December 12, 2017. https://www.washingtonpost.com/entertainment/books/hitler-banned-it-gandhi-loved-it-the-story-of-ferdinand-the-book-and-now-film/2017/12/11/43a03e8c-de7f-11e7-bbd0-9dfb2e37492a_story.html?noredirect=on
- ³¹⁾ May Massee, “The New Horizons in Children’s Books.”
- ³²⁾ 清水真砂子『あいまいさをひきうけて』かもがわ出版、2017年。54-55.
- ³³⁾ Joel Lang, “No fighting,” *ctpost*, December 8, 2017. <https://www.ctpost.com/living/article/No-fighting-12414428.php> Kimberly Marselas, “Ferdinand Charges Back Onto Big Screen; Classic Children’s Book by Terp Author Becomes New,” TERP, December 12, 2017. terp.umd.edu/ferdinand-charges-back-onto-big-screen/#.xi_EQ2j7SUI

図版

- 1～3 Marjorie Flack and Kurt Wiese, *The Story about Ping*, Viking, 1933.
 4～5 Munro Leaf, Illustrated by Robert Lawson, *The Story of Ferdinand*, Viking, New York, 1937.

引用文献

- Bader, Barbara, *American Picturebooks from Noah’s Ark to the Beast Within*, Macmillan, New York, 1976.
- Bechtel, Louise Seaman, “May Massee, Publisher,” *The Horn Book*, July-August, 1936.
- Flack, Marjorie and Wiese, Kurt, *The Story about Ping*, Viking, 1933.
- Hodowanec, George V. ed., *The May Massee Collection; Creative Publishing for Children 1923-1963 A CHECKLIST*, Emporia State University, 1979.
- Leaf, Munro, Illustrated by Lawson, Robert, *The Story of Ferdinand*, Viking, New York, 1937.
- The May Massee Collection, William Allen White Library, Emporia State University.
- Sayers, Frances Clark, “May Massee as the Authors of Her Books See Her,” *The Horn Book*, July-August, 1936.
- “The Hunt Breakfast,” *The Horn Book Magazine*, April, 1967.
- アザール・ポール、矢崎源九郎・横山正矢共訳『本・子ども・大人』紀伊國屋書店、1957/1990.
- 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明に子どもの文学普及に貢献した人々(1)～アン・キャロル・ムア①～」『敬和学園大学研究紀要』第22号、2013年.
- , 「アメリカ児童図書館黎明に子どもの文学普及に貢献した人々(2)～アン・キャロル・ムア②～」『敬和学園大学研究紀要』第23号、2014年.
- , 「アメリカ児童図書館黎明に子どもの文学普及に貢献した人々(5)～メイ・マッシー①

～』『敬和学園大学研究紀要』第26号、2017年.

一、「アメリカ児童図書館黎明に子どもの文学普及に貢献した人々(6)～メイ・マッシー②

～』『敬和学園大学研究紀要』第27号、2018年.

ザンデレ・イネセ「国際子どもの本の日」ラトビアからのメッセージ「本の中では、小さいものが大きい」JBBY, *Book & Bread*, Vol. 134, 2018.

清水眞砂子『あいまいさをひきうけて』かもがわ出版、2017年.

瀬田貞二『瀬田貞二子どもの本評論集 絵本論』福音館書店、1985年.

フラック、マージョリーぶん、ヴィーゼ、クルトえ まさきるりこやく『あひるのピンのぼうけん』瑞雲社、1994年.

ミモザフィルムズ・ムヴィオラ『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』プログラム、2019年.

リーフ、マンローおはなし、ローソン、ロバートえ、光吉夏弥やく、『はなのすきなうし』岩波書店、1954年.